

委員長 細江英公(ほそえ えいこう)

私は毎年選考委員として作品を拝見しています。もう 11 年になりますか、非常に楽しみにして選考委員会に来ます。応募作品には、風景や人物、あるいは近所の人たちが対象になっているものもあり、自由な雰囲気があり非常に新鮮です。

珍しいものを撮るというのも面白いのですが、自分がよく知っているものを撮るとするのは、知っているからこそ、自分でしか撮れないものができるわけです。それを見た人たちは、初めてですから「おっ」と思う。そうすると、自分の周辺にはものすごい宝がたくさんあるんだということに気がつくと思います。好きでやっている写真というのは、嫌いなものを撮る必要は無いんです。好きなものを撮っていれば良い、それで初めて深い作品というのが生まれます。そこを考えてもらいたいと思います。

受賞作の藤岡亜弥さん『川はゆく』。この写真集は、いわゆる出版社が多くの読者に対して「今度こういうのを出版しましたからどうぞ」などといった、注目を浴びてどんどん売れるという類いのものではありません。自分のための出版物、それを他の人も喜んで見てくれると考えた方が良いでしょう。この風景をぜひ残しておいて欲しい、などといったリクエストがあったのではなく、冒頭にも申し上げましたが、自分が好きだから、自分だけのために一生懸命に撮る写真というのが一番魅力があります。自分の好きなように撮れば良いので、自分にとって面白いかどうかということが一番なのです。

私も広島へ何回か通いました。広島に関する本も出していますから、この写真集を見ますと胸が引き締められる気がします。ここに写っている原爆ドームなどはライトアップされ、イルミネーションも美しいのですが、ある意味問題意識が感じられなくなっているような気がします。多くの人が見に来てくれれば広島のためにはなるのですが、あまりにも観光化されすぎると…という思いも写真集を見ながら感じました。

林忠彦賞は山口県の周南市という地方都市で実施されています。予算にしろ時間にしろこうした大きな事業をされるのは大変なことだと思います。しかしこれまで続けてこられたのは大変価値のあることです。写真家の皆さんは、ぜひ意欲を持って優れた作品を応募してください。